

淨土

1979-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一冊
昭和二十四年四月二十八日 遷都省 (東京から遷都後) 第三十五号
昭和五十四年三月二十五日印刷 昭和五十四年四月一日発行
第四十五卷 第四号



若人よ、厳しい練習に勝て

——「富士山の飛魚」古橋広之進氏の話——



先般ある会で、終戦後の日本人の皆さんだ
氣持を奮いたたせた「富士山の飛魚」として
有名な古橋広之進氏のお話を聞きました。そ

の時話された内容の一部を紹介しようと、現
在米国の水泳選手は一日三〇キロメートルは
泳ぐとのことです。それに比べ日本の選手は
体格的に劣るのですから、むしろそれ以上に
練習を積まなければ勝てない訳ですが、その
練習量は非常に少ないそうです。プール等施
設環境はまことに良くなっておりますのに、
今の若い人は、苦しいのを我慢して練習しな
いし、また勝利に対する感激性が薄いと話さ
れていました。確かに古橋選手の時代、汚れ
た水も替えないようなプールで泳いでいた頃
を思いますと、今のプールは素晴らしいものデ
す。「これからは水泳も身長と体重で区別し
なければ勝てないのではないか」と氏は語っ
ておられましたが、重量により人間の力はあ
る程度別れるにせよ、体力の劣っている者が
ハードトレーニングの結果大きい者に勝つと

ころに、スポーツの醍醐味があるわけですか
ら、ボクシングやレスリングのように級別す
ると面白味がなくなるのではないでしよう
か。

ある人が日本の競馬はあくまで日本の競馬
で世界に行ったら勝てないと言っておられま
したが、たしかに、野球等もいささか日本の
野球で、米国とタイトルをかけてやったら勝
てそうもありません。これからは、バレーボ
ール、卓球、バドミントンなどのようにネッ
トをはさんでやるスポーツしか勝てなくなり
そうです。バレーボールでも、もしもアメリ
カンフットボールをやるような体力の選手に
やられたら、勝てなくなると思います。米國
の大学には、男子のバレーボールはないそう
です。アメリカンフットボールとか、ラグビ
ーのように、一メートル八〇以上もある人間
が百メートルを十秒で走るような敏捷な選手
を探すことは困難であります。練習すれば
勝てるスポーツもないわけではありませんの
で、若い人達に大いに頑張って貰いたいと思
うわけです。

(佐藤行信)

四月号



まず親とは、正助二行を修する者は、阿弥陀仏においてはなはだもって親昵とす。

——『選撰本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P. 27)

目次

法話

釈尊の降誕……………斎藤昭俊 ……(2)

花まつりによせて

生命の息吹き……………平野仁司 ……(6)

〈随想〉ほとけとの出会い(一)……………佐竹隆三 ……(11)

〈連載〉

六時礼讃の「無常偈」に生きる(1)……………安居香山 ……(16)

善導大師の生涯とその教え(5)

道綽禪師…………… ……(20)

〈読者の声〉信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(五)……………吉村孝 ……(32)

法然上人の弟子たち⑧

津戸三郎為守のこと〔四〕……………梶村昇 ……(24)

浄土句集……………一田牛畝選 ……(30)

〈新刊紹介〉『宗教学小論集—天の饗宴と地上の饗宴—』(中村康隆著) ……(29)

〈表紙裏・巻頭言〉若人よ、厳しい練習に勝て……………佐藤行信

念仏ひじり三国志⑩——法然をめぐる人々……………寺内大吉 ……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



釈尊の降誕

齋さい藤とう昭あき俊とし

(大正大学教授)

釈尊はスッドーダナ王とマヤー夫人のもとに、紀元前五六〇年(また四六六年)生れた。それはヴァイサーカの八日であった。父母は三十五歳前後であったという。夫人は産後の日だちが悪く、七日後になくなられ、夫人の妹マハーバジヤールティに養育された。当時の釈迦国はコーサラ国の一支国であった。その頃北インドには十六大国があり、中でもコーサラ国、マガダ国、パンサ国、アバンティ国の四国が最も強力であった。

釈迦国はシュラーヴァステイ(舍衛城)を首都としていた。コーサラ国の属国であったが、コーサラ国から釈迦国に武芸を学びにきたり、相互に往来が密であった。

マヤー夫人は、夢の中で、白象が胎内に入っているのを見た。その白象は六牙をもち、麝香の匂いでみちていた。

インドでは白象は吉兆を示すものであり、やさしく、力持ちである。実際に寺院の周囲の彫刻に、象やライオンがあるのを見られても分るように、それは力を表わしている。

月みちて、マヤー夫人は当時の習慣に従い、生家にかえり出産をすべく出発した。途中ルンビニ園に立ちよられた。

アショカの木(インドではサラの木といっている)の花をたおそうとしたときに、マヤー夫人の右脇から生れ、七歩あゆんで「天上天下唯我独尊」とおっしゃったといわれている。

脇の下から生れたことについては、アウルヴァ王の誕生は股から、ブリツは手から、

インドラに似たマーンダトリ王は頭から、

そしてカクシーヴッド王は腋から、

そのように彼の誕生も、また常と異っていた。

(アスヴァゴーシャ『仏陀の生涯』)

とあるように、常とは違う偉人の誕生を、常とは違った形で表わしているものと思われる。もう一つの考え方はブラミンは頭、クシャトリヤは手、ヴァイシヤは胴、スードラは脚といったカーストによる位置づけから、釈尊はクシャトリヤの出身であることを示すものだという。そして、

七仙の星宿の如き彼は、

惑はず、広きあしどりで、

高く浮彫した蓮のしるしを地に打ち印し、

かくも確かな七歩を歩んだ。

「我は悟りのため、世の幸せのため生れた。

かくて之は我が最後の生である」

彼の獅子の歩みをなし、四方をみつめ、

かく勝れた理に充ちた言葉をのべた。

(アスヴァゴーシャ『仏陀の生涯』)

ここにも象徴としての七歩、そして言葉がある。七歩は全世界を歩むことを意味し、悟りのため、世の幸せのために生れたことを宣言した。この言葉が後に「天上天下唯我独尊」と表わされた。

○ルンビニ園

ルンビニにあるマヤー堂は表面がけづられたマヤー夫人の脇の下から生れる釈尊の彫刻を本尊として祀っている。そしてその彫刻に色がぬられ、金箔がはられ、旗があげられている。

赤く塗るのはヒンドウ教徒のしきたりで、金箔をはるのは南方仏教徒の習慣で、旗をあげるのはネパールなどのやり方である。つまり、このことは現にマヤー堂が生きた信仰の対象となっていることを示している。

釈尊が生れると、二すじの水と湯が天が下って釈尊の湯あみをさせ、ヤクシャ王は手に金色の蓮華をもって釈尊を保護した。そして神々は釈尊の誕生を祝福し、竜王はマンダラーの花をまいた。一点の雲もない空から栴檀の香りのする水蓮と蓮花のまじった雨が落ちてきたと語られている。

ここに釈尊とナーガ族との関係を示すと思われる竜王が登場し、後世仏教の守護神として現われるヤクシャは、守護神として釈尊を保護している。

現在、マヤー堂にそばに池がある。それは次の如く記されている。

また住居の東北隅に一つの水清き井が、自らに現れ出て、

内宮の婦人は驚きにみち、

そこでチルタでのように儀式を行った。

法の功德を求めて彼を見るために来た。

天神の群で森はみたされ、

それは華咲き、芳香ある木々で、

心熱く彼をあがめた。

花咲く木々は一時にその花を開き、

その香は風で四方に拡がり、

女蜂は飛びかかって歌い、

集まる多くの蛇は空気を吸い、呑み込んだ。

(アスヴァゴーシャ『仏陀の生涯』)

清き泉が現われることはチルタの条件である。インドの聖地、聖所には必ず沐浴の地、沐浴の河がある。ルンビニに清き泉ができたことは、釈尊の降誕によって、聖地となり、後に四大仏蹟の一つとなることを意味している。チルタでの儀式は、聖地で沐浴をして神に祈る儀式である。これは既に聖地になったことを示しているのである。そして天神が喜び、木々はときならぬ花をつけ、その香りは、あたり一面に匂った。

南方仏教では寺院にお参りするときには、匂いのいい花を仏前に供える。芳香と美しい花は至福と満足を示すものである。そして動物達もそれを満喫するのである。

そこには人も、動物も、植物も一つの喜びの世界に混在している。インドの風土にはそれがある。インドの世界には包みこみ、包みこまれる風土がある。人も、動物も、植物も一つのマンダラの中にある。

まさにルンビニ園が釈尊の誕生によって、花につつまれ、芳香にみち、人も動物もその喜びに包まれた様子が見事に画かれている。

C アシタ仙

釈尊の誕生を知ってアシタ仙が釈迦王の宮殿を訪れた。アシタ仙は学問があり、苦行をへて多くの人々から尊敬と信頼をうけていた。釈迦王スッドーダナはアシタ仙に洗足の水と供える水をもって迎えた。水は清めるために用いられる。

インドではより清浄なものが尊ばれる。肉を食べるものより、野菜を食べるものの方が清い、アルコールを飲むものより、水をのむ方が清いのである。清浄にするには、身の垢を清めることと、心の垢を清めることとある。心を浄めるには仏教には戒律の中に示されるように、貪る、怒る、邪見にふけることをやめ、体に関しては生物を殺す、盗む、姦淫することをしてはいけない。口に關しては嘘をいう、二枚舌を使う、悪口をいう、駄目を弄することとをなくすことによって清められる。身体のおとし、体の行為を清め、心を浄めることが菩提への道である。インドでは日常生活の中に清浄感がある。

ここに大仙は驚いて王子を見た。

彼の足は輻輪の相があり、

手足の指に網膜があり、

眉間に白毫があり、象の如き陰蔵があった。

（アスヴァゴーシャ『仏陀の生涯』）

ここにも凡人と違ったいくつかの相が述べられている。足に輻輪があり、手足に水かきのようなものがあり、眉間に白毫があり、男根が腹の中に入るといふ。そしてアシタ仙は涙をながしながら次の如くいう。私のできなかった生き滅する道を知る知者が生れたとして、彼は王位をすて、凡ての欲境に無関心で、

精進して真如に達し、

愚癡の暗闇を破ろうと、

智慧の日として世に輝き渡ろう。

彼は智慧の船で、

病の泡を投げ、老の波にゆられ、

死の恐しい奔流の流れる苦海から、

助なく運ばれる不幸な世人を渡すであろう。

（アスヴァゴーシャ『仏陀の生涯』）

釈尊が悟りをひらかれて、人々を救うことを予言した。釈尊は事実そのように仏教の教えを説いて今日まで、その信奉者がたえないのである。

（本文中の『仏陀の生涯』は、平等通訳によった。）

— 花まつりによせて —

生命の息吹き



ひらの
平野 仁 司

(浄土宗児童教化連盟常任理事
座間市宗仲寺住職)

うららかに春めぐり来て、新しいいのち成り、ここに再び釈尊降誕会「花まつり」を喜び合うときを迎えた。
自然の営む四季の移りかわりをわがことのように大切にして、この折目正しい循環の節を末永く記憶に留めて
おきたいと願う心情を、数々の古典の中にも見出すことができる。その中でも春、特に花まつりの頃の風情は格
別の趣きがある。

折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。「もののははれは秋こそまされ」と、人ごとに言うめれ
ど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の声などことも
外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草もえいづるころより、やや春ふかく霞わたりて、花もやうや
うけしきだつほどこそあれ……(中略)「灌仏のころ、祭りのころ、若葉のこずゑ涼しげに茂りゆくほどこ
そ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、仰せられしこそ、げにさるものなれ。(『徒然草』)

花まつりの頃の風雅さを余すところなくとらえ、冴えた筆致で綴られた古典が示すように、春には力強い命の
息吹きを感じる。さらに注目すべきは、昔から日本人が心のよりどころとして大事に育てている仏を思う心の一

端を、この随筆からも読みとれることである。「花まつり」という言葉の響きは、いのちのあたたかさを憧憬する不思議な魅力を含蓄している。

春の花として代表されるのは、まぎれもなく桜の花であり、その花びらがいさぎよく身を処すような散り方をするので、美徳の象徴としてこれからも時代を超えて日本人の心に生き続けることだろう。確かに、満開の桜の木の下にたえずむとき、「宝石をちりばめた雲のようにしばし空にたゆたい、清き流れのうえに舞いながら、さらば春よ、われは永遠に旅に往く、とでも言うかのように」(岡倉天心『茶の本』)な光景に、誰しも一度ならず経験され、感興を共にされたに違いない。このように日本の桜の花のごとく、花としての命を全うして美しい哀れみを秘めて身を散らしてゆく種のもは他にそれほど例がない、といわれている。

さて、いささか幽玄の境地に傾く世界より眼を一転させて、いのちのとまどいにより散ってゆく現代の風潮、「都会の寂しさ」をとりあげてみたい。

暖冬の羊年があけて間もない頃、『浄土』一月号に掲載された大本山知恩寺法主・林豊法台下の年頭所感を拝読して「孤独は山になく街にある」に心をとられた。大都会にはその規模に正比例して大いなる孤独があるものだ、とする理由を追求された論述は、私が常日頃から痛感していること、つまり、孤独の理由の一つとして「人を信じない、猜疑心で硬直した現代人の心のあり方に問題がありはしないか」という点に一致していることで、大変に感銘を受けた。

連日報道される悲しいニュースは、深刻な社会問題化しつつあるように、死を急ぐ若者やさびしい老人のわびしい死を伝えてくる。現代の不安とは、かたくなに自己を閉鎖してしまうところに原因がありそうに思える。早まって死に馳せた人々には、まだ完全に孤独に徹しきるという手段が残されていたのだった。

私はこのような風潮を憂慮しつつも、孤独の極みから思いがけない心の世界を展開し、それによって培われた

純粋な「童心」が「詩心」となって、豊かななぐさめの心をのちの世に残した二人の詩人を、ここに思い起すことになった。

今でも鮮明な印象として座右銘の一つとなっている言葉に「生命の直路」がある。私が大正大学一年生の時、東京大学で教鞭をとられていた松浦一教授から受けた「文学概論の講義」で、比較文学的な立場で学んだ芭蕉とワーズワースの作品中の「寂しさ」についてのテーマであった。芭蕉は天涯孤独の境涯の中で謙虚に自然をみつめ、その中に溶け込んで地に還った人であり、その作品はいつの世にも通用する新鮮な驚きを与える。

一方、ロマンティズムで十八世紀末から十九世紀にかけて英国の文学界を風靡したワーズワースも「寂しさの中から見つけた人生」に開眼した詩人だった。この二人に共通するものは「完全に孤独に徹した」、きわめて静寂な生涯があった。芭蕉の最後の句となった「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」で、ここに来ていよいよ自分の臨終を自覚する境地をみせているし、ワーズワースは「虹」の詩において初めて子どもが虹をみたときの感動の瞬間をとらえ、大人が感動を失ってゆく人間になるのをいましめ、「子どもは大人の親である」という驚異的な発想をめぐらしている。二人には一たん、対象に沈潜しきったのちに無尽蔵に湧き起る心の感動の世界を楽しんでる風さえみえる。しかし、現代の複雑な多忙さの中でも、これらの句や詩からどれほど多くのなぐさめを与えられるのか計り知れない。

大自然の中に生れ、育つ人間が、その自然にひたむきに向き合って、あらゆる枝葉の虚飾をぬぐい去った境地のその瞬間から誕生する生命体、無礙・自在そのものの大自然と同じ無垢の心が、かの不朽の傑作となり、ものあはれに至る透徹した美を醸成するゆえんであろう。

二十数年も前、松浦教授から受けた「生命の直路」による感動の記憶は、今も脈々とわが内部に息づいている。「祈りは生命の直路である」という真理をつきつめると、祈る人とその対象となる者とが相牽き、相合う直路となることに尽き、法然上人の「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」の教えの「一向に」とい

う真理とが、まさに同質なものであるのだという確信に満ち、これが力強く今の私の支えとなっている。

花まつりの今日この頃は、万物の新しい蘇生をよるこぶ声が地上にこだましている。

二千数百年も前にはるか西方、インドの地に釈尊がご誕生となり、爾来、後の世に絶えることなく慈悲の心を施されて、心貧しき人々のよみがえりに一筋の光となっている事実を考えるとき、一個人としてのゴータマ・シッダルタの誕生にまつわる因果はまことに意義深い。

折も折、わが宗仲寺においても、ちょうどこの花まつりの時期に永年の願いが成就し、一つの厳かな新しい生命、山本豊市氏（元東京芸大教授・現愛知芸大客員教授）制作により、等身大、乾漆彫刻による「水子観音像」の誕生をみることとなった。ことの運びに至る過程は、幾度か新聞や『芸術新潮』等を通じてご存じの方もおりかと思うが、当山の水子観音像制作に当られた山本豊市氏は、日本彫刻界の巨匠として知られ、フランスでマイヨールに師事され、天平期に最盛期を迎え鎌倉時代になって衰退した乾漆彫刻の技法を現代に復活させて、独自の創意と工夫を重ねて見事に今日の乾漆彫刻を開花された方として、あまりにも有名である。四十年間にも亘る月日から数々の傑作が生れ、昭和十二年の帝展で「岩戸神楽」を出品されたのをはじめとして、大船駅丘陵に白亜の麗姿を浮上させている、あの柔和な「大船観音」や箱根二の平にある彫刻の森に、一きわ格調高い趣を添える「とぶ」などの逸品がある。ことに山本氏の手による「女の顔の習仏」には独自の芸境を開拓しているが、起伏の少ない東洋的な女の顔面にわずかに陰影をひろげる表情の波紋をたくみに掬いあげる独特のテクニクは、彼がギリシャのアルカイック彫刻や古代の仏像、あるいは能面の顔容のもついわゆるアンシャン・スマイルス（古式の笑）から学びとった至芸であらう（『川添』No.348）。

ここに一年半余に亘る山本豊市氏の真心と汗の結晶が成り、入魂の儀式も無事完了して、新しいいのちのお守としてわが本堂内に奉安された水子観音像の誕生までには、いかに幾多の悲しい人々の思いがひそんでいようとか。今年の晩秋には亡き父の第十三回忌を迎えようとするとき、先代の後を継ぎ住職を拝命してよりこの方、水子として葬り去らねばならない悲しい事情による悔いや嘆きを痛くわがことのようにお聞きし続けてきた。

釈尊ご誕生の初声について「天上天下唯我独尊」と宣言され、七歩を歩まれたという伝説を、幼少の頃よりたびたび聞かされてはいるが、年ごとにこの遠大なみわざの意味がより深みを増し、生きている人間に課せられた永遠の課題のように思われてくる。この伝説を現代に生かすための知恵として、七歩の歩みをもう一度、この機に臨んでふりかえてみたい。六歩をまず世のありさまにおける地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道の世界にみため、心の迷いからおこる苦しみに、釈尊はさらにこの六道を乗りこえてもう一歩進み出で、この一歩によって永遠の救いを誓われたという事跡が七歩の意味という。これらの再認識によって、最後の一步が踏み出せるかどうかの問題にかかわってくる。この勇氣と努力こそ、われわれがなさねばならない日々の心づかいであろう。

にこれる世に、もろもろの事情により人の道に盲目となり暗闇の道を歩むこととなった人々のために、釈尊がこの世に現われたという意味と同様に、生後間もなく他界した靈位、あるいは人工中絶によって逝った法名なき人命など、陽を仰ぐことなく生への道を閉ざされた幾多の罪なき宿命の水子の靈に、わが山内で四月の陽春のように暖かく、また、桜の花びらのように柔和なまなざしの水子観音像が、やすらかな眠りを与え、悲しみに暮れる親心にもなぐさめとなって、明日のための光となることを、この麗わしい「花まつり」の日に願ってやまない。

《隨想》

ほとけとの出会い (一)

佐^さ 竹^{たけ} 隆^{りゅう} 三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)

永遠(とこしえ)の思惟のみ仏(ほとけ)にぬかづけば
をさなきころのおもほゆるかも

この作品は三年前(一九七六年)の『浄土』七月号
の表紙の見返しに自筆の短冊として掲載されたも
のでありますが、文字も拙くまた短歌そのものも作
品としての完成度は不充分のようでまだ満足できる
ほどのものでもなく、恥かしいものをお目にかけた
と今では後悔しています。

しかし、編集人の宮林先生からは過分の讃辞を受
け、また、某作家もいい歌だとほめて下さったとの

ことで、有難いことだと思っております。

この作品の成立の背景として、同時に次のような
小文が添えてあります。短歌は、言うまでもなく三
十一文字のぎりぎりの表現が生命であり、本来説明
や解説を必要としないものであるべき筈であり、歌
詠みのはしくれのわたしでもそれ位のことは心得え
ておりますが、次に示すような解説のようなものを
付け加えたのは、よほど作品に自信がなかったの
でしょう。編集者の許可を得てここに再録させて頂
きます。



思惟観音の像にぬかづくとおのずから心がすなおになり、子供の頃のことを思いだし、静寂なやすらぎのなかにつまれて、無条件にただひたすらに有難いという気持になる。

人間の記憶は何歳頃までさかのぼれるかは、個人差もあることではあるし判然とはしないが、私の場合三、四歳頃ではないかと思う。私が宗教的なものにふれたのは三歳頃らしいが、私の記憶にはない。父系の祖母に連れられて当時の私は素直にお寺詣りに行き、足のしびれも訴えずきちんと正坐して、行儀の良い子供として老人達からほめられ、それがまた自慢で祖母が私を寺に連れてゆくということなっただけ。

私の記憶に残っている祖母の像は、或る夏の夕暮に、西日で紅く染った白壁の蔵を背景に、西方浄土を拜んでいる姿である。前後の脈絡なしに、太陽に向って合掌する祖母の姿が鮮明に浮かび、その表情の安らかさといったらうらやましい位である。

何の教養もない、一介の田舎の開業医の母親に過ぎない祖母に、仏教の教えがどれ位理解できたかは

疑わしいが、それでもなおかつこのような安心立命の境地に祖母が達しえたとするならば、やはり法然の思想は偉大であったと言わねばならないであろう。(原文のまま)

三十一音の短詩型文学では、所詮「をさなきころのおもほゆるかも」としか表現する以外に方法はないでしょうけれども、わたくしの幼時体験の原景として、西日に向って合掌する祖母の表情の安らぎがいまなお鮮明かつ強烈であります。

そして、この祖母の原景像がその後のわたくしの人生を支配し、導き、今日に至らしめたことは言うまでもありません。本当の意味でわたくしがぼとけに出会うことができたのも、実はこの原景像のおかげであり、祖母——父——わたくしを貫いている家族的無意識のなせる業(わざ)でありましょう。

わたくしが現在大正大学の教授の末席をけがしているという事実すら、実は、わたくしにとっても意外な運命の展開であります。昨年の八月で十年を経過したことになります、非常勤講師(カウンセリン

す。心の中では、この若い内科医に対して激しい怒りの感情と共に、自分の直観が正しいという判断がおこりましたが、何故か虚しい気持ちになってこれ以上論争する気になれませんでした。

この医者は胃という臓器の所見にとらわれて、病める人間全体を問題にするという視点を失っている——これがその時の率直な印象でした。彼は、わたくしの専門の精神医学を逆手にとって、「胃神経症」というレッテルをわたくしにはりつけて、わたくしを屈服させたつりでいるらしいが、彼は精神医学はおろか心身医学すら知らない未熟な医者なのだ、本当は気の毒な憐れむべき存在なのだ——こう考えることによって、わたくしは微笑をもって彼に別れを告げることができました。

胃潰瘍ではないかというわたくしの直観による診断が正しかったことは、一年後癌研付属病院内科熊倉先生によって実証されました。わずかに二枚のレントゲン撮影で、胃噴門部後壁の多発性潰瘍を発見されたばかりではなく、この潰瘍は昨日今日できた新鮮なものではなく少くとも一年以上経過した古い傷

であるということまで、ガストロ・ファイバースコープ（俗にいう胃カメラ）の検査所見から、明かな診断が下されました。

あとで知ったことですが、熊倉先生は胃のレントゲン撮影の専門家であり、当時すでに若いけれども有能な内科医として盛名があった由で、後に共同研究者達と一緒に朝日文化賞を受賞された立派な医者です。

学問でも芸術でも良き師にめぐり合うということは決定的なことでありますが、患者にとつて名医に遭遇することは有難いことであります。「有り、難い」とは、現代の日本語の用法では、感謝の意を表現する言葉であります。文字通りに解するならば、「有ること、難い」ですからこのような表現はめったに濫用すべきではないと思いますがいかなるものでしょうか。

仏教の世界でも同じようなことが言えるのではないのでしょうか。空海とその師の恵果、道元とその師の如浄、また、親鸞とその師の法然などの関係は、真の意味での良き「出会い」であったと言えるので

はないでしょうか。

それはともかくとして、患者のわたくしにとって幸運であったことは、熊倉先生という名医との出会いであり、そして、何よりもうれしかったことは、医師への信頼をとりもどして、すべてをまかせることができるといふ安心感を持ち得たことでありました。

このようにして、癌研付属病院の内科に何のためらいもなく入院することになりましたが、ここでわたくしは真の意味で、はじめてほとけとの出会いを経験したのであります。

元来それほど壮健という訳でもなく、またスポーツなどでとくに身体を鍛錬したこともなかったのですが、いわゆる病氣らしい病気に罹ったことがなかったわたくしにとって、一カ月以上も入院するということは、生まれてはじめての経験で、わたくしの人生にとって、この入院生活はわたくしに新しい転機を与えてくれる結果となりました。

(つづく)

◇ “浄土句集” 欄投稿要項

ホトトギス同人の一田牛畝先生(福岡市正定寺住職)を選者にお迎えして誌面に登場した、“浄土句集”のコーナーはなかなか好評です。一田先生も熱意をこめての選句に努力されており、二ページに増頁したこのコーナーに、皆様の新鮮な一句を掲載したいわけです。どうぞ、俳友のお仲間をお誘いいただいて、ふるってのご投句をお願いします。ことに初心者の方々こそ、たくさんご投句下さい。

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛

■六時礼讃の「無常偈」に生きる■

— — —

やす
安 居 香 山
い こう さん

(大正大学教授・文博)

○

私達は、常に無常な人生を、いかに生きるかを考え、そして実践せねばなりません。正直な所、五十の坂を越し、人生も終焉のコースに入った私には、この問題は他人事ではなくてきました。ここまで生きてこられた身の幸福を喜ぶと共に、残された人生を、どのように生きるかということ、真剣に考え、そして実践をするかを、迫られてきます。

私も、今まで曲折に富んだ人生を歩んできました。片田舎の百姓の子と生れ、戦争を経験し、そして今日に至

った道程は、私なりに語ってみたい気持ちも多々あります。しかし、今ここでそれをするのは、本題の目的ではありませんので、差し控えますが、善導大師の六時礼讃の「無常の偈」を取りあげて、私なりに筆を取ってみようとしたのは、自分の問題として、この「無常偈」を考えてみたからに外なりません。

私も宗教家の一人として、時には人生を語り、時には、仏のみ教えを説いてきました。しかし、その多くは解説者としてのそれであり、教育者としての知識の伝授であって、決して私自身の問題としてではありませんでした。従って、時には他人事のように、時には空事のよ

うに、他者にうそぶいていたに過ぎません。しかし、最早や「無常偈」の中に語られている問題は、先程も申したように、他人事ではなくなってきました。

何かこのように申しますと、いかにも私が生死の巷を彷徨しているかのようにありますが、幸いなことに、今の所、元氣一杯働き廻っている最中です。しかし、働き蜂のように働けば働く程、何かそこに寂寞を感じ、人生の空しさを感じずにはいられないものに、さいなまされます。そして、一向に地に足を著けることなく、この人生を、我武者羅に、歩いてきてしまったように思えてならないのです。そんな反省もあって、何か書かぬかと言われた時、善導大師の「無常偈」を通して、ここで静かに私なりの人生を振り返ってみたいと思った次第です。

そんなわけで、これは決してお説教でもなければ、学問的見解でもなく、極く平凡な人生に対する感想ということになるかと思えますので、あらかじめその点をお許し頂きたいと思えます。又、そうした人生の反省のための故に、時とすると私事にわたることが、頭をだすこともあろうかと思えます。空事でない人生の、私なりの反省記ということで、これも又、お許しを頂きたいと思う

次第です。

ところで私は、一昨年でしたか、浄土宗の布教シリーズに、「無常にめざめよー善導大師の教えからー」という教化小冊子をだして、皆様の目をけがしたことがありました。ここでは、「無常にめざめよ」と大上段に構えて、人生の無常を説き、無常に生きぬいた人の例を掲げて、大布教家のような顔をして、説くところがありました。

これは、布教シリーズというパンフレットの性格もあって、止むをえず大上段にふりかぶったところがありましたが、実はこの時も、こうしたものを通して、私なりの人生を考えたかったのです。特に癌でなくなった一人の画家、三橋節子さんの伝記である、『湖の伝記』という本を読み、さめざめと泣いた私が、他人事でない人生を考えさせられた直後に書いた小文でありましたので、この小冊子は、私なりの人生観として、今もその気持ちには変りがありません。

しかし、今これを読み返してみると、やはり何か空々しい、他人事を語るものがあることが、いなめません。人間というものは、何処まで業の深いものでしょうか。

自分がピンピンしていると、どうしても「生」と「死」の問題を語るときには、何か自分にはまだかわりのない事のように、思い勝ちになるようです。そして、今ここで筆を取っている時でさえも、やはり他人事のように、他人に語りかけるような文章になっていることを感じて、厭になってしまふのを止めることができません。ともかく、随分前置きが長くなってしまいました。本稿は、そんな気持ちで、何回かに分けて、「無常偈」に生きる道を、語ってみたいと思う次第です。

○

ところで、善導大師の六時礼讃というのは、すでに皆様のご承知のように、正確には「往生礼讃偈」と申しまして、大師の五部九巻とされるご著書の中の一つでありまして、まことに有名なものであります。これが六時礼讃といわれますのは、昼夜六時にわたって、この経をあげることができるよう、構成されているため、このようにいわれるものです。そしてその六時とは、日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中をいいます。いかなれば、一日二十四時間を、六時に分けて、一日六回にわたって読

経するのであります。

更に、これを礼讃と申しますのは、このお経をあげる時は、単に坐って読むだけでなしに、自己の罪を懺悔しながら礼拝し、み仏を讃歎しつつ、極楽往生を願うことより、このように呼ばれるわけです。

この六時礼讃は、今日浄土教系の宗派では、よくあげられるのですが、浄土宗では特にこれを尊重し、「浄土三部経」と共に、しばしば法要などに用いられております。それには、独特の節まわしがついておりまして、誠によいものであります。私などは、浄土宗のお経の中で、一番よいものだと思っています。又、一番、私自身好きなお経であります。その調子も、五言、或いは七言の詩句のようになっていて、あげていても、聞いていても、何かその音律に引きずられて、極楽に行ってしまうのではないかと思われる程であります。

この六時礼讃を、声のよい人があげたりしますと、誰とはなしに、その世界に落ち込むような陶醉感を持たされるものであります。

かつて法然上人の晩年、その弟子の住蓮、安楽という二人の坊さんが、声美しくこのお経をあげていたため、

その美声にひかれて、宮中小御所の女官、鈴虫、松虫という二人が、鹿ガ谷^{しかた}での別時念仏にはせ参じたことがありました。六時にわたるおつとめであってみれば、昼夜を問わず、寺に泊りこんでのことであつたわけです。そんなわけで問題は大きく発展し、二人の僧侶は打ち首の刑に処せられると共に、師匠にあたる法然上人がその責任をとられ、四国に流罪になるまでに至りました。

それというのも、この六時礼讃が、それ程に有り難く、そしてよいお経であつたがためでありまして、昔からこの礼讃が、人々にどんなに喜ばれたものであるかを、この一事はよく物語っています。

ところで、この六時礼讃の六時のそれぞれには、「無常の偈」という詩句がつけられております。実はこれは、善導大師が、いろいろな経典を資料として、構成せられたものでありますが、これが又、なかなかによいものでありますと共に、これにも独特な節まわしがついておりまして、仲々によいものであります。紙上にこれを再現することができないのは、誠に残念でありまして、よいよいと私が何回申しまして、一向に皆様には、お分りにならないものと思います。最近、これを録音した

カセットもできておりますので、機会があつたら、是非聞いてみて頂きたいと思います。又、法要などで、よく用いられますので、注意して頂ければ、その機会もあるかと思ひます。

話が、随分本題をそれたようですが、ここではこの「無常の偈」を通して、私なりの人生を考えてみようと思う次第でありまして、次回より、少しずつ本題に入らせて頂くことにしたいと思います。

(つづく)

◇浄土宗布教シリーズ◇

⑥『無常にめざめよ―善導大師の教えから―』

(安居香山著)

⑦『二河白道―善導大師の教えから―』

(上田見宥著)

B 6判・十六ページ、定価一部四十円

(発売元)

〒105 東京都港区芝公園4-7-4

浄土宗出版事業協会

■善導大師の生涯とその教え■

— 五 —

◇ ◇ 道綽禪師 ◇ ◇

○
さきに曇鸞大師のことについて申しのべましたが、いまここでは、道綽禪師についてお話してみたいと思います。

道綽禪師は五六二年に、曇鸞大師と同じ中国の山西省汾水県に生まれました。十四歳で出家し、とくに『涅槃經』を学び、いくたびも講義をされましたが、曇鸞大師の創建された玄中寺において、その頌徳碑の文に深く感動し、亡き曇鸞大師の智徳に引かれて、『涅槃經』を講ずる学僧をすてて浄土の行者として回心し、専ら修行に励まれたのです。隋の大業五年(六〇九)以来といわれますから、禪師の四十八歳ごろより、ひたすら阿弥陀仏に

帰命する念仏三昧の生活でした。また『観無量壽經』を二百余遍も講義し、山西省の南部の晋陽、太原、汾水の三県にわたってお念仏をすすめ、浄土の教えを説かれたのであります。お念仏の数をかぞえるために小豆を用いることを教えられ、信仰が篤く、お念仏をよく唱えるものは、八十石とか九十石を数え、少ないものでも二十石も数えたといわれています。

かように、念仏三昧に入り、『観無量壽經』によって浄土の觀察行にはいられた道綽禪師の名声はいよいよ盛んとなり、津々浦々までに伝えられ、その教えを乞うものが不便な山中の寺である玄中寺を数多く訪れ、長安の都までひろまったといわれています。また、禪師についていろいろの奇瑞なども伝えられており、いかに敬慕の

的であつたかがよく知られるのであります。

禪師が六十五歳のおり、自分の死期が来たことを知つて、人々にそのことを伝えると、禪師を慕ひ念仏を行ずる大勢の人々が、この玄中寺に集まり満ちあふれていました。このとき曇鸞大師が七宝の船に乗つてあらわれて、道綽禪師に「浄土の堂はすでに成就したけれども、余報いまだ尽きず」といわれ、み仏が空中にあらわれて蓮華がふりまかれて、信者たちがこれを拾つて植えたところ萎まずに馥郁としていたといひます。しかも、禪師は日々ますます健康になられ、ますます念仏の信仰をすすめ、『観無量寿經』を説かれたといわれます。

また、道綽禪師が七十五歳のころ、この当時耆耄の高位文徳皇后が病氣になられ、太宗皇帝はわざわざ道綽禪師を訪ねられて、皇后の病氣平癒を祈願されておられます。このことが、今もなお玄中寺に伝えられているところを見ますと、その当時の仏教界において、いかに禪師が徳高く名声がひろまっていたかということが知られるのであります。

思えば、大乘經典を求め、その中より選びとつた『涅槃經』の研究を通じて求道の基礎とされた道綽禪師でありましたが、いまだに生死の問題に確信をもちえなかったものでありましょう。五十歳近くになって、曇鸞大師のゆかりの地、石壁山玄中寺に詣で、割然として道が開かれたのであります。

「涅槃經の講説を捨てて浄土行を修し、一向に阿弥陀仏を専念し、礼拜供食し、相統して間断せず」

と善導大師と同時代の迦才は、その著『浄土論』に道綽禪師のことを記していますが、まさに浄土念仏への転換は、禪師にとつて、喩えようのない勇氣と決断とともに深い感激にあわれたことでありましょう。曇鸞大師を慕う真心をこめて道綽禪師自身、『安樂集』につきぎのように述べられておられます。

「曇鸞大師のごときは、康存の日、常に浄土に修す。またつねに世俗の君子あり。来たつて法師を呵して曰く、十方の仏国皆浄土なり。法師なんぞすなわち独り

意を西に注ぐや。偏見を生ずるに非ずや、法師答え曰く、われはすでに凡夫なり。……（中略）ただ法師と一面相過せば、正信を生ぜざるものは勧めて信を生ぜしめ、もしすでに正信を生ぜしものは、皆勧めて淨國に帰せしむ」

申すまでもなく、曇鸞大師は羅什と僧肇の思想を通じてインドの竜樹の大乗の空觀思想に傾倒し、竜樹より無量壽の教えを導かれ、やがて世觀の『淨土論』を注釈して『無量壽經』を通じて淨土への道を願求されたのであります。しかし、曇鸞大師は著名な学者であるところから、道綽禪師が碑文を通じての出会い、名実ともに師と仰ぎ、求道の心を深めていくのであります。曇鸞大師の名声が高く大思想家であるのに対し、一方、道綽禪師自身は、かならずしも恵まれた立場でなく、激しい時代——戦争、敗戦、亡国、掠奪、流浪などを体験して、不幸な世に生きつづけ、その時代に生きる人々の救済に心を痛める禪師でありました。むしろ、学者より伝道者であったのです。そのことはなにを意味するかといいますと、めぐり合った曇鸞大師以上に時代に対する認識の厳しさ

を味わい、五濁惡世、末法到来の憂慮がひしひしとなされたのであります。

道綽禪師は、その著『安樂集』に、

「時に約し、機に被らしめて、勧めて淨土に帰せしむとは、もし教えが時と機とに適應すれば、修しやすく悟りやすし」

といわれていますが、このような時代に対する認識観が確立されたためには、その背景に一つの流れがありました。隋時代の仏教復興の前後には、末法という時代認識と、その時代に生きる人間と、その社会と人間の救済という問題が仏教界では中心の課題としてとりあげられつつあるときでありました。有名な信行が三階教を提唱したのもこの時代であります。かように、末法の自覚という問題が、道綽禪師の心をゆさぶらないはずはありません。それはただ単に歴史觀としてではなく、現実に生きた問題として、自己に直接つながる危機意識として起ってきたのであります。

曇鸞大師に傾倒した道綽禪師は、大師の『往生論註』を熟読して、その教えに心血をそそいだのでありますが、大乘仏教徒たるものは、なによりもまず菩提心をおこすことをすすめています。しかも菩提心とは、仏になろうと願う心であり、仏になろうと願う心は、衆生を救わんとする心であり、衆生を摂取して、み仏の国土に生まれしめる心です。いま回心して、浄土に生まれようとするためには、まずもって菩提心をおこすことが大切である。といっておられるのです。

このように道綽禪師は大菩提心をおこして、浄土往生への念仏の実践に尽粹され、ただひとすじに衆生教化につとめられたのであります。その著『安樂集』には、数多くの経論を引き、浄土の教えの真実であることを証明され、とくに、聖道門の諸派に対して、浄土の一門を建立しようとするために、周到な配慮がなされていることが、その行間にもよく見えるのであります。

曇鸞大師が、どちらかというと『無量寿経』を中心として説かれているのに対し、道綽禪師と善導大師は『観

無量寿経』を中心として説法されているのをうかがい知ることが出来ます。この『安樂集』一部は十二大門に区別されています。その第一大門は、『観経』の玄義ともいふべきものですが、あとの十一大門は、『観経』の要義を述べたものといふことが出来ます。このことは、『観経』の説かんとするところが、なんといっても時機相應の教えであるという禪師の確信がその篤い浄土信仰が、この文にあらわされていることなのであります。

『安樂集』には、中国において浄土への生活をなした人々として、菩提流支三蔵、慧龍法師、道場法師、曇鸞法師、大海禪師、法上法師の六人をあげて、これらの人々の歩まれた道を、みずから歩みゆくのであることを告白しておられますが、先覚者の芳躅を慕って、「念仏三昧は三昧中の王である」とまでいわれた道綽禪師のもとに、やがて善導大師が訪れることになるのであります。道綽大師は八十四歳をもって往生の素懷をとげられますが、善導大師との出会いは、禪師が八十歳、大師二十九歳でありました。

法然上人の弟子たち ⑧



津戸三郎為守のこと [四]

梶村昇 かじむら のぼる

(亜細亜大学教授)

法然上人から為守宛の手紙は、全部で九通数えられるが、その中で月日だけわかっているのが五通、月日もわからないのが四通ある。そして、いずれも何年に書かれたものか、はっきりしていない。先に述べた「九月十八日付」の消息も、前後の関係からみて、建久六年（一九五）のものであらうと推察しただけである。

この建久六年にもっとも近いころの消息と思われるのは、日付も何もない四通である。それは一つは、「戒袈裟等乞はれる時の消息」、二つは、「念珠を所望しける

時の消息」、三つは、「真影を所望しける時の消息」、それに四つ目は、「或時の消息」の四通である。

『九巻伝』は、以上四通の消息をまとめて記しているが、その前書に、次のように書いている。

津戸三郎為守は、ふかく上人の勸化を信じ、偏に極楽の往生をねがひて、二心なく念仏しけるが、同じくは出家の本意を遂たく思けれど、関東のゆるされなかりける事を歎、在俗の身なりとも法名をつけ、戒並に袈裟をたもつべき由上人に申入けるに付て、彼御返事

に云

として上人からの御返事を記している。上人は、「何事も時いたる事にて候へば、強にいそぎ思召すべきことに候はず。いかにも又すまふにもより候はず」と記されている。

為守は、先に阿弥陀三尊像の開眼を上人にお願いし、「九月十八日付」消息。今度は、いつそのこと出家をしようと思いたったのであろう。ところが幕府がそれを許してくれない。それならば在俗のまま、法名もつけ、戒もうけ、袈裟も着て、出家と同じ生活をしようと考えて、上人にそのことを申し入れたのである。直情径行、まったく為守らしいふるまいに思われる。それに対し上人は、「急ぐ必要はない。何ごとも時がいれば道がひらけることであるし、出家しようが、在俗のままであろうが、どのように生活しても、念仏生活にかわりはない」とさとされている。この御返事一つをみても、そこに上人の生き方をまざまざと見せられる思いがする。浅はかな人智のはからいを捨てて、大いなるみ仏のお力に随順していけばよい、ただそれだけのことなのだとさとされたのである。そうでありながら、そこに人としてのまごころ

をつくされているのである。法然上人は為守からの願いを容れて、戒は十重禁三聚淨戒を別々に記し、袈裟は、かけ古るしてはあるが新しいものを送るといい、「なりの房号」も記し、法名もつけてあげている。

念珠を所望した際にも、「常に持て候ずとひとつまいらせ候」とある。真影を所望した際には、「真影は熊谷入道が書いたことがあるが、まったく似ていないので捨てて帰国した。今度も残念ながらそうである。だから私の姿のかわりに善導和尚の御影をおがまれたらよいであろう」と述べている。いずれも上人のあたたかい思いやりの感じられる消息ばかりである。「或時の消息」というのは「ゆめゆめ御念仏おこたらず、決定往生の由と存せ給べく候云々」というもので、別段とりたてていうべきものではないようである。

以上四通を建久六年から程遠からぬころの消息と考えたのは、為守は、まず阿弥陀三尊像をつくり(建久六年のことか、「九月十八日付」消息、ついで、袈裟、房号、法名、念珠、真影と、念仏生活に必要なと思われるものを順次整えていったのではないか、と想像しただけのことであって、それ以外に特別の理由はない。為守が何でも上

人におねだりしている様うかがえて、ほほえましくさえ思われる。

このほかに、「九月二十八日付」の消息というのがあ
る。これも何年の九月なのかわからない。『九卷伝』
は、先に述べた「九月十八日付」の消息、すなわち、二
位尼宛と本文の消息を記したすぐあとに、「又後年に」
として、この「九月二十八日付」消息を載せている。
『四十八卷伝』には、同じく「九月十八日付」の消息の
あとに、

この御返事（すなわち九月十八日付）を給てのちはい
よいよ念仏の外他事なかりけるを見うらやみて、専修
念仏の行人、かの国中に三十余人までになりければ、
此よしを上人へ申しけるに 上人御返事云

とあって、続けてこの「九月二十八日付」が載せられて
いる。「九月二十八日」という日付も、『九卷伝』や『四
十八卷伝』には記されていない。『元亨版拾遺和語灯録』
の巻中に、この消息が入っていて、そこにだけこの日付
があるに過ぎない。このようなことで、この消息が何年
のものかわからないが、この問題は一応このままにし
て、暫く消息の内容を追ってみたい。

おほつかなくおもひまいらせつる程に、この文返々
よろこひてうけ給はり候ぬ。さても専修念仏の人は、
よにありかたき事にて候に、その一国に三十余人まで
候らんこそ、まめやかにあはれに候へ（引用文は元亨
版）

という書き出しで始まっている。「おほつかなく」と
は、心もとなく、とか、待ちどおしく、とかいう意味で
あらうから、暫く為守からの連絡が途絶えていて、上人
が心もとなく、また待ち遠しくも思われていたのであら
う。そこへ為守から「武蔵一国に専修念仏の人が三十余
人にまでなった」と言ってきた。そして上人は、「返す
がえす喜んで」、この文をご覧になられた。そして「専
修念仏の人というものは、仲々珍らしいのに、武蔵一国
に三十余人までいらっしやることは、まことにあっぱれ
なことである」と言われたのである。そして、続けて、
「京都辺でもそのようなことは、類のないことである」
と述べ、

ひとへに御ちから、又くまかやの入道なんとはか
らひにて候なれ
と言われている。『四十八卷伝』の先の引用にもあるよ

うに、熊谷や津戸が、ひたすら念仏に励んでいる真摯な姿に人々がうたれ、念仏者が徐々に増えていったのであろう。このあと、上人はまた有智・無智のことに触れて、

阿弥陀ほとけの御ちかひには、有智無智おもえらばす、持戒破戒をもきはらず、仏前仏後の衆生をもえらばす、在家出家の人をもきはらず、念仏往生の誓願は平等の慈悲に住しておこし給ひたる事にて候へば、人をきらふ事は、またく候はぬ也

と述べている。後にも述べることとなるが、有智・無智の問題は、津戸の生涯にわたってまつわりつた問題であった。しかし、それは何も津戸や熊谷にだけまつわりつたわけではなく、専修念仏そのものの問題であったわけである。仏道修行などというものは、特別なものが、長年にわたって、身を粉にして修行してこそいえるものであって、津戸や熊谷みたいに、この間まで兵馬の間に過ごしてきて、仏教の何たるかも知らないものが、突然に仏教に帰依したからといって、それで救われようはずがない。これが当時の人々の固定観念であったと思う。その人々に対し、ひたすら念仏をすれば救われる、

学問もいらない、戒律を守る必要もない、像を造り、塔をたてる必要もない、と説いてみても、それがすなおに信じられようはずがない。人々の最大の疑問はそこにあったものといえよう。それは庶民から、鎌倉幕府の人々、いや、南都北嶺の「ゆゆしき学生」にいたるまでの疑問であつたはずである。固定観念というものはこわいものである。それを最初に根こそぎ打破するとは容易ならぬことである。法然上人はそれを成し遂げられたのである。

学問ははじめてみたつるは、きはめて大事になり、師の説を伝習はやすきなり（四十八巻伝）巻五）とは、上人が叡山黒谷でまだ勉強中に述べられた言葉であるが、ここに上人の気迫と思想の柔軟性と稀有の才能とをみてとることができる。

有智・有智の問題は、まさに宗教史上のコペルニクスの転回であった。その当面の人となつた熊谷・津戸らは大変なところに逢着したものだとも思う。

さて、この消息の中には、もう一つ重大なことが含まれている。それは、釈迦がこの世に現れた本懐（本来のねがい）は、専修念仏によって救われるということを説く

ためであった、と上人が述べておられる点である。なぜこれが重大なことか、と思われるかも知れないが、考えてもみて下さい、法然上人は、釈尊滅後一六〇〇年余も後の人である。この間、仏教は展開に展開を重ね、一大蔵経を初め、数えきれない碩学、揺ぎない教団と、まさに鉄壁の牙城を誇ってきたのである。その仏教界を向うにまわして、こう述べているのである。

されは念仏往生の願は、これ弥陀如来の本地の誓願なり。余の種々の行は、本地のちかひにあらず。釈迦如来の種々の機縁にしたかひて、様々の行をとかせたまひたる事にて候へは、釈迦も世にいて給ふ心は、弥陀の本願をとかんとおほしめす御心にて候へとも、衆生の機縁人にしたかひてときたまふ日は、余の種々の行をもとき給ふは、これ隨機の法なり、仏の自らの御心のそこには候はず。されは念仏は、弥陀にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐也

というのである。読みにくいでしょうが、原文をよく読んでみて下さい。インド、中国、日本と伝えられてきた今までの仏教、とくに南都北嶺で説き、日本中に流布されている仏教はみんな、「仏の自らの御心のそこには候

はず」、仏の本心ではない、といっているのである。まったく破天荒の宣言ともいうべきものである。平安朝仏教にも念仏はあった。しかし、それは寓宗といって付随的存在であった。念仏だけでは救われず、念仏を通して本家にもどってから救われるというものであった。それを上人は全く逆転してしまった。上人は言う、釈尊はいろいろな行をお説きになられたが、それはみんな機根に應じての教えであって、釈尊の本心ではない、念仏こそ釈尊の出世の本懐であった、と。今にして思ってもこれは容易ならぬことであるのに、当時にあつては驚天動地のことであつたといえよう。

法然上人の名著『選択本願念仏集』をはじめ他の法語類にもこのような思想を見いだすことはできるけれども、この消息ほど確言しているものは他にはないのである。上人はこのことを為守に書き送っているのである。為守がこの意味をどれだけ解したかはわからないが、上人の揺ぎない信仰に触れて、彼はどれほど安堵したことであろう。

(つづく)

新刊紹介

宗教学小論集 — 天の饗宴と地上の饗宴 —

中村康隆 著

本書は、前大正大学学長中村康隆師の研究論集である。永年に渡り、宗教学、宗教社会学、仏教民俗学などの分野で研鑽を積んでこられた、その成果の一つの集成としてまとめられたものである。もとより著者は、フランス系の新社会学派の動向に明かしく、その宗教社会学の学問的基盤も、海外の諸文献を駆使したところに成り立っている。そしてその中でも、とくに宗教儀礼に関する研究が、著者の眼目であったと思われる。そうした方向が次第に仏教儀礼や仏教民俗の研究に進んで行く要因でもあったわけであろう。とりわけ、著者中村師が中心となって大正大学に設立された仏教民俗学会は、機関誌『仏教民俗』を年々発行し、先には中村康隆編『仏教民俗の領域』という大著をも公刊されている。

さて本書の内容は、題名のごとく、ほと

んどが数ページから十数ページ程度の小論集である。これは著者が折々に発表されてこられた研究報告のレジメや概説を骨子としているわけであるから当然である。しかし、第一章「宗教学断篇」十九論文、第二章「仏教儀礼と浄土教信仰」十二論文、第三章「宗教社会学片鱗」五論文、第四章「神仏分離覚書」五論文と配列された本書の構成はなかなか当を得たもので、本書の性格をよく代弁している。そして各論文の末尾には、初出の書名雑誌名及び発表年時が示され、附記等の文章ともあわせて、著者の学問的に真摯な態度がよく表わされた丁寧な編集であることがうかがえる。

もとより筆者には、各論文の一文を評する資格も能力もなく、またここでは紹介する紙数もあまりないので、今は本書の内容の一端をお知らせする意味でも、紹介者が興味を抱いた二、三の論文題目を掲げておきたい。——第一章では、初期の論文「宗教的儀礼における生と死」、「宗教における酔わず要素について」、「宗教の厳粛と人生の慰安」、それに表題の副題にも採用された「天の饗宴と地上の饗宴」などが重厚であるが、「悪口祭」、「鬼おどし」、「一つ目小僧と針供養」等の小論がむしろユニークである。——第二章では、「開眼と洒水」をはじめとする仏教儀礼に関する諸論文の中で、「宗教的指導者における現世肯定と超克」が注目される。——第三章は宗教社会学への寸鉄が記され、——第四章は神仏分離問題に関する具体的な実態調査も含めた論攻が展開されている。

総じて専門的ではあるが、一般にも興味深い論集であり、広く紹介したい。(原)

△A5判・二六六頁、上製函入、価四〇〇〇円、昭和五十三年十二月刊▽

(発売元)

〒170 東京都豊島区巢鴨三五一—一八
株式会社 国書刊行会

振替(東京)五一六五二〇九

浄土句集

一 田牛 畝選

た芍薬である。花咲けば仏の供華に。

餅搗の大騒ぎして終りけり

東京 田中 秀代

山形 松田 光誓
空の紺氷柱のひまにひろこれる

東京 阪入 等達
老いぬれば貸し借りもなく年の暮

評 雪が止んだあとの日和の空は紺碧で、

評 年取れば借りることも貸すことも縁遠

氷柱と氷柱の間にひろこっている空は、
何の穢れもなく清浄無垢である。

くなる。借りてまで色々なことをする気
力もなくなるし、又貸して呉れる人もな
くなって行くようである。こうなれば生

東京 真野よし子
古里の味噌送り来て根深汁

甲斐も、希望もなくなり、年末となって
も、督促されることもなく、集金に行く
こともなく、せめて俳句でも作って老後

評 古里は遠くにあつて思うもので年を取

を樂しみ、新しい年を迎える人は倖者。

れば取る程、いつまでも恋しい。其の故
郷から味噌が送って来た。年老いた母の
手作なれば母の味がするにちがいない。

よく見ればいと細やかに芽吹くもの
よく見ればいと細やかに芽吹くもの

其の味噌での根深汁は、しみじみと母の
味を賞味することの喜びがいっぱいであ
る。そんな古里を持つ人は幸福である。

評 しとしとと芽木の雨がつづいた。気付
かなかつたが庭先にちよんちよんと赤く
芽ぶくものがある。忘れていた去年植え

評 餅搗は大変である。隣り近所寄り合っ
て搗いているのである。声掛け合ふて搗
く人、もみ手、ちぎり手賑やかである。

大変ある、大騒である。

京都 安藤 寛

初夢も思ひ出せず我老ひぬ

福岡 上滝津弥音

梅の香に人出に酔える日和かな

福岡 高良 慈風

牙返る大本山の長廊下

福岡 荒牧 還愚

暖冬に梅のほころび早かりし

福岡 高良 幸代

月脚伸ぶ夫の写経に吾も和む

山形 松田 允子

春泥を背なにとばしつ子等帰る

東京 鈴木 葉子

母恋のうた口づさみ薺打つ

東京 猪瀬 幸子

添書に一句ものして賀状かな

東京 新井 新生

カナダより孫健やかに初電話

東京 栗原やえ子

軒下にさがる氷柱の還ましく

東京 吉原 時子

寒灯や文字を追いつつ写経する

山口 上野 明達

十夜会座木魚叩いて静心

東京 島居 千代

涅槃会に兼ねて水子供養かな

福岡 服部 光代

横櫛は母の形身や冬の月

東京 阪入志津枝

老梅や工匠偲ぶ御神殿

群馬 島津 か寿

初日の出願ひもあらたペランダに

東京 末常てる子

春雪といふには深し下駄のあと

福岡 権藤みきを

涅槃像孫も手合せ拝みけり

山口 三井 寛静

三重 森 静枝
風抱いて顔ののぞける童かな

東京 細田 初枝
法灯を継ぐ子に嫁や菊の寺

東京 原口 敬子
古針を豆腐にさして針供養

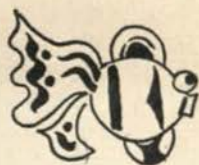
滋賀 松尾 郁芳
お見合の宵の春月笑めるごと

山梨 青山富貴江
庭隅に一つ見つけし露の臺

福岡 国友 星畝
初釜の茶碗は僧の京土座

福岡 前田 秀峰
礼拝を終へし御堂に初日かな

一田 牛畝
天平の仏の里の土筆摘む



信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(五)

吉村 孝

諸の劇難と、諸の閑と不閑とを救うに、真実の際を分別し顯示す(痛苦の最も劇しい地獄・餓鬼・畜生等の難処と、仏道修行の暇のある人と暇のない人を共に救うのに、実際の相をはつきりと示す)。

諸の如来の弁才の智を得、諸の言音を入りて、一切を開化するなり(如来が持っている正しく思うままに述べる能力を得て、各国人の言語を悟り、一切の衆生を教え導く)。

世間の諸の所有の法を超過して、心常に諦らかに渡世の道に住し、一切の万物に於て、意に随って自在なり(迷いによって現われてくるあらゆる世間の事柄を超えて、心は常に明らかに迷いの世間を渡る道にあつて、総ての物について執着が消え去り心は自由になっている)。

諸の庶類の為に、不請の友となり、群生を荷負して、これを重担となす(諸の衆生の為に、求められないのに進んで大いなる慈しみをもってその親友となり、一切衆生を救済し尽すことを自分の重い荷として、これを自らの重い責任とする)。

如来の甚深の法蔵を受持し、仏の種性を護りて、常に絶えざらしむ(仏の奥深い經典を受授し、誰もがもっている仏性を大切に護ることを常に心がけて決して止めるような事があつてはならない)。

大悲を興して、衆生を慰れみ、慈弁を演べ、法眼を授け、三趣を杜き、善門を開く(人の苦しみを抜く心を興して、衆生を慰れみ、慈悲の心をもって教えを説き、真理を把握

する智慧の眼を授けてやり、地獄・餓鬼・畜生の三惡道を閉ざして、善の功德の門を開いてあげる。

請われざるの法をもつて、諸の衆庶に施すこと、純孝の子の、父母を愛敬するがごとし（求められないのに進んで慈を与える教えをもつて、諸の衆生に施すに、親孝行の子が父母を愛し教うのと同じように親しきをもつて受けるようなものである）。

諸の衆生を視せしむること、自己のごとし（諸の衆生を御覧になることは、自己を見る如くに氣を付けてよく見る）。

一切の善本は皆彼岸に渡し、悉く諸仏の無量の功德を獲、智慧の聖明なること思議すべからず（一切の仏果を成就する原因となる善根・功德は皆念仏修行者を悟りの彼岸に導いて、残らず仏の限らない功德を得させ、又、得た仏の智慧の貴いことはとても考えることはできない）。

是の如き等の菩薩大士、称けて計うべからず、一時に來会したまいき（このように多くの菩薩たちは数えることはできない、それらの菩薩が一寸の間に集まって來た）。

今までに長々と菩薩の大願と実践が述べられておりますが、これは他の經典には余り見られない形の説法で、

『無量壽經』には仏や菩薩の目的と実践を真似るように、又読んで直ぐ判るように具体的に書いてあるのがあります。これが他の經典と異なる勝れた所であります。

又、釈尊は『無量壽經』の卷下に世間の惡の苦を戒めて苦惱を除き、そこに淨土を現わして更に信心を勧める目的で、三毒・五惡を説いておりますので、それらの教えを受けたいと思います。本文は岩波文庫本『無量壽經』一七八ページの三毒であります。三毒とは貪欲・瞋恚・愚痴の事です。

しかるに世の人、薄俗にして共に不急の事を諍う（しかるに世の人は概して、人心は輕薄で純朴でなく、どうでもよいことで争つてばかりいるということで、急とは世の中の変化するものに對する執著から急いで離れる事を説く仏法のこと、不急とは世間の種々の欲望の對象となるものに執著して離れようとならない人々の事です）。

この劇惡極苦の世の中に於て、身の營務を勤めて、以て自ら給濟す（この四苦八苦の世の中で、世間の努めを勤めて、自分で生計を立てて世渡をしている）。

尊となく卑となく貧となく富となく、少長・男女共に錢財を憂う（尊いと卑しいと又、貧しい者と豊かな者と又、

年少・年長、男女と皆共に金銭と財産に関しては心を痛めてゐる。

有るものも無きものも、同然にして、憂いの思いはまさに等し（財産の有る者も無い者も、同じことで、有ればそれを失わないように苦悩し、又無ければ何とかして得たいと悩み、その憂いの思いは財産が有っても無くても同じである）。

屏營として愁苦して、念いを累ね、慮りを積み、心の為に走せ使われて、安き時の有ることなし（不安であちこち立ち廻り憂い苦しみ、そんな苦しみの思いや考えを積み重ね、心が常に苦しみに悩まされている為に、安穩を得る時がない）。

田あれば田を憂い、宅あれば宅を憂い、牛馬六畜・奴婢・錢財・衣食・什物、復た共にこれを憂う（田や家などがあればそれを維持することに就いて憂い、牛・馬・犬・羊・豚・鶏など六種の家畜、使用人、金銭、衣類や家財道具などがあれば、それらについても、それぞれ憂いを懷いている）。

思いを重ね、息を累ね、憂念し、愁怖す（苦痛の溜め息を重ね、憂いを思い怖れを懷く）。

横に非常の水火・盜賊・怨家・債主の為に焚れ、漂れ、劫奪せられて消散し磨滅す（この間違つたやり方の為

に甚だしい水害・火災に罹り、盜賊・敵・貸し主の為に家財は焼かれ田は流され道具などを奪い取られ、財産の総ては消滅してしまふ）。

憂毒、松々として解くる時あることなし（憂いが毒となつて心を悩まし常に恐れおののき、何時になつてもその苦悩から解き放されることがない）。

憤を心中に結びて、憂悩を離れず、心堅く意固く、まさに縦捨することなし（怒を心に懷いて憂い悩みを離れず、心や考え方が堅固になつてるので変ることがない）。

或は摧碎によりて身亡び命終れば、これを棄捐して去り、誰も隨う者なし（又、盜賊や水火などの災難によって身が打ち碎かれ、命が終れば財産は捨て去り誰も随いついてくる者はいない。これは特は大事な文で釈尊は人は誰でも必ず死ぬものであつて、その時には莫大な財産があつても皆捨てなければならぬ事を説いて、それ故に存命中に物に対して執着があつてもその物はやがて消滅するものであつて自分の物にはならないということ、更に如何に永く生きていたくても命の終る時が来れば自分の命さえも思うようにはならないもの故、自己も亦無いということがここに説かれているように思われます）。

尊貴も豪富も亦斯の思い有り（貴い人にも金持ちにもま

たこの患いがある。

憂擾万端にして、勤苦すること此のごとし(憂いや恐れが次々と重なつて生じて、苦しみ痛むのはこのようなものである)。

衆の寒熱を結びて、痛と共に居る(種々に肝を冷し身に汗をかく程の苦しみが共に住みついている)。

貧窮・下劣のものは、困乏して常になし(貧乏で下品なものは常に財物がなくて苦しんでいる)。

田なければまた憂いて田有らんことを欲い、宅なければまた憂いて宅あらんことを欲い、牛馬六畜・奴婢・銭財・衣食・什物なければ、また憂いてこれあらんことを欲う(財産があればそれを維持することを憂い、又、財産が無ければ憂いてこれがあることを願う)。

たまたま一あればまた一を少き、これあればこれを少く、有ること齊等ならんことを思う(時に、一つの物が満たされれば他に不満足のものがあり、これが有ればあれが無いということ、総てのものが皆等しく揃っていることを望んでいる)。

たまたま具さに有りと欲えば便ち復壊散す(しかるにたまたま十分に持っていると思えば消え散つてしまう)。

是くの如く憂苦して、当に復た求索すれども時に得ること能わす(このように憂え苦しんで求めようとしても、たまにでも得ることはできない)。

思想するも益なく、身心俱に勞れて坐起安からず(思い悩んでも何の益もなく、身と心が共に勞れて日常の生活も決して楽なことではない)。

憂念相隨つて勤苦すること此の若し(憂いの思いが永く続いているので精を出して働かねばならない状態はこのようなものである)。

亦衆の寒熱を結びて痛と共に居る(また様々の肝を冷し身に汗をかくほどの苦しみと結びついて苦痛と共に生活をしている)。

ある時はこれによりて身を終え命を夭ぼす(ある場合にはこれによって一生を無駄に費し命さえも若くして亡ぼしてしまふ)。

背て善を爲し、道を行ない、徳に進まず、寿終り身死して、当に独り遠く去るべし(進んで善の道を行なうが徳を積むこともできず、寿終り死して自分一人で遠くへ去るのは当然の事である)。

趣き向う所あれども、善惡の道よく知る者なし(この

道を進んでみようという心持ちはあるけれども、真に善惡の行ないの報いがどのような形で現われるものであるか、その道理をよく知る者はない。

『雜阿含經』にこの三毒について「貪欲永く尽き、瞋恚永く尽き、愚痴永く尽き、一切の諸の煩惱永く尽くるを涅槃」とあります。ここに貪欲・瞋恚・愚痴が永く起こらない事が涅槃であると説かれているように

涅槃は死ぬことではなくて、生きていて仏の教えを悟り得て実行する事であります。若しも死後に役立つ為の仏法であるならば釈尊はこのように具体的な説明はしないでしよう。

ここまでが三毒の中の貪欲の説明ですからこれが理解できますれば大分悟れた事になります。これに瞋恚と愚痴の説明が続きます。

(つづく)

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施〕
〔浄土〕四十五巻・四月号以降

諸物価の高騰と諸般の事情により、しばらく頑張っていました当法然上人讃仰会の会費を、従来の一年分二、〇〇〇円から、表掲の一年分二、五〇〇円の新年会費に値上げさせていただきます。どうぞ会員の皆様の暖かいご配慮とご援助をくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人讃仰会



念佛ひじり三国志

(卒)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



將軍実朝の御台所として鎌倉へくだる坊門ノ姫君を迎えにきた使節、その筆頭北条政範が着京早々に急死した。十六歳の若者であった。

北条時政と後妻牧ノ方との間にできた男児である。その姉は平賀朝雅の妻になっている。

遺体は東山の山腹に葬られた。法然が住む吉水禪室のすぐ裏山だった。結城七郎朝光から頼まれて埋葬の儀一切を安楽房が手がけた。関東から上洛の旅を共にしてきた安楽房だった。住蓮房もこれにしたがった。

「左馬助殿は旅中、だいぶお疲れの様子だったが……」と安楽房は結城七郎に訊いた。

左馬助とは北条政範のことで、「路次ヨリ病惱、ツイニ大事ニ及ブ」と「吾妻鏡」は書く。正しい記述であったかどうか。

結城七郎はきっぱりと否定した。

「三日の夕食に、院から貝の塩焼が運ばれた。あれが曲者だ」

「曲者？ 何か毒でも」

「うむ。左馬助だけではない。あれに箸をつけた兵衛尉もおかしくなった」

＜北条政範の埋葬＞



前号のあらすじ

専修念仏の浸透は、いまや全国の津々浦々に及んでいたが、鎌倉幕府の御家人武士団の間でも称名念仏は広く行なわれはじめていた。しかもその念仏信仰を通しての結束が、源頼朝亡き後の北条執権体制の確立に大きな影響力をもっていたという。事実北条時政配下の主要な武士団の中でも、結城朝光や八田知尚などは安楽房連西とも連がりの深い念仏信者であった。ともかく、安楽の鎌倉武士団への念仏教化の実績は、政治的な要素の色濃いものであったとしても、きわめて大きな足跡であったといえよう。

いずれにしても頼朝以後の鎌倉幕府の政治的な事件に安楽、住蓮をはじめとする専修念仏教団の動きが重なり合っており、時は流れて行く。そして京都では、後鳥羽院の目が歴史の事件を静かに見守っていた。

「あの元氣な常秀殿も……」

兵衛尉常秀は千葉常胤の孫である。頼朝旗上げの折、上総の大軍を率いて参じた常胤は坂東武家きっての実力者であった。使節席次三番手であるその孫も食当りで重態におち入ったという。

「明月記」によれば千葉常秀も北条政範のあとを追うようにして死んでいる。路次ヨリ病悩、大事ニ及ブ、などではなかった事実が明らかである。

「わしらを皆殺しにするつもりか」

と、結城七郎は憤慨する。

また、自分ら戦鬨に馴れた者は旅先でみだりにナマ物なぞ口にしないのだが、彼らは年若いために、と戒しめの言葉も洩らした。

「左馬助が死ぬ直前の晩がひと騒動だった。六郎が怒って朝雅に喰ってかかった」

六郎は畠山重忠の息子重保である。

鎌倉の利益代表として滞京中の平賀朝雅が夕食の手配もしたはずだ。このザマはどうしたことか。宮廷の陰謀に一枚加わっているのではないか。

と面詰する。

一方、朝雅も自分の義弟を毒殺する謀議に加わるわけがないではないか。

と言いつ返す。

亭主（雅朝）ト畠山六郎重保ト諍論ノ儀アリ。シカ
レドモ会合ノ輩コレヲ宥ムルニヨツテ無為ニ退散
シオワンス

「吾妻鏡」が書く騒動の実体だ。

「証固はどこにもない。だが殿上人たちが何を考え、何を企むか、はかり知れぬわい」

結城七郎は撫然たる表情である。後鳥羽院が精力的に頼朝亡きあとの鎌倉武士団の分裂策謀をめぐらす魔の手を朝光は肌で感じているにちがいない。

埋葬を終えると、安業住蓮が先達となって称名念仏をねんごろに修した。結城七郎、八田知尚、佐々木盛季、安西四郎、相馬師信ら、みな熱烈な念仏信徒であった。

相馬師信の父次郎師常はこの翌年、六十七歳で死ぬが、臨終で「端座合掌セシメ、サラニ動揺セズ。決定往生アニテソノ疑イナシ。コレ念仏ノ行者ナリ。結縁ト称シテ緇素（シソ）コゾリテ集リコレヲ拝ス」と「吾妻鏡」は紹介している。

この「吾妻鏡」は北条家の御用史書、というのが定評であるが、念仏信仰を尊重している特徴も目立つ。北条を取り巻く武士団にこの信仰が浸透していた事実を、問わず語りに証かしている。

例えば正治二年の五月十二日、鎌倉で専修念仏の徒を断じた事件を紹介する。

將軍頼家の命令を受けた比企四郎時員（頼家の妻若狭局の弟）が、政所ノ橋の袂で、十四人の称名念仏者を捕えた。着している黒衣を剥ぎ取って焼いた、という事件である。

このとき伊勢の称念者なる僧が時員に向って、

俗ノ束帯、僧ノ黒衣、オノオノ同色トシテ用イ来
ルトコロナリ。何ゾコレヲ禁ゼシメ給ウベキヤ。
オヨソ当時御政務ノ体ヲ案ズルニ仏法、世法トモ
ニ以テ滅亡ノ期ト言イツベシ

と憶せず反抗の氣勢を示した。

黒衣の何が悪い。これを「禁色」としたのは中国で黒衣の僧が政務に関与したという古事に由来しただけのことだ。この末法末世、われら念仏者は積極的に政治へ加わってゆき世直しをはかろうとするのだ、と所信を開陳したのであらう。

時員はその伊勢ノ称念者の黒衣に火をかけた。ところがいっくに燃えつかず、彼は悠々とその黒衣をまっと去っていった、と「吾妻鏡」は書き添えている。

この「締め」の部分に念仏信仰への記述者の姿勢が明示されているではないか。

東山を引揚げてゆく途次、結城七郎は安楽房に相談を持ちかけた。

「左馬助が死んだため、お迎えの使節に一名欠員が生じた。誰か補わねばならぬ」

「それなら親能入道の実子が京にいる。すでに十八歳、左馬助殿の後任には最適であろう」

「親能入道にそんな子がいたのか」

親能入道は安楽とは従兄の関係にある中原親能である。同じように後白河法皇に仕える北面ノ武士だったが、北条義時に招かれて鎌倉へ下った。侍所の能吏となつて大江広元を補佐している。

この欠員補充はすぐに実現したが、政範を追うようにして死んだ千葉常秀の補充はつかなかった。

前後十名づつの護衛武士。それを一名不足のまま坊門ノ姫君は、同年十二月十日鎌倉へ向けて出発する。

出発日が延引したのは、政範らの忌明けの五七日を待たためであらう。

藤原定家はこの日の「明月記」で一行の供揃いを紹介

したあと、興味深い言葉をさしはさんでいる。

忠清(坊門)ノ先、女房ノ興六、各々華麗過差、喻ヲ取ル物ナシ。金銀錦繡ニ非ザルハナシ。泣キテ沙塞ヲ尋ネ、家郷ヲ出ズルカ。天下ノ経営、只コノ事ニ在リト云々。見物堵(カキ)ノ如シ

泣いて沙塞を尋ね、家郷を出るか——である。鎌倉の將軍実朝へ嫁入ることが、中国で言う沙塞(沙漠の蕃地)へ旅立つような愁嘆場として受けとめられている。これも天下の政局安定のため、というわけである。

都の貴人たちの、鎌倉へ向けた偽らざる感覚であるう。

鎌倉では將軍家の御台所、という女性至高の椅子を用意しているわけだが、京都では蕃族への身売りにひとしい。まさしく京都の貴族にとって鎌倉武士なぞ野卑な蕃人以外の何者でもなかったのである。

二

坊門ノ姫君が鎌倉へ下ってから半年間、東西では目

まぐるしく事件が瀕発する。そのフィナーレから先に書く。翌くる元久二年七月二十六日の「明月記」は、

天晴ル、鷄鳴ノ後、舍人男走り来タリテ云ウ、院ノ御所ニ武士群衆ス。旌旗ソノ数アリト。驚キ起キ、人を以テ伺ワシム。出入ヲ禁ジ門ヲ固ムト云々。更ニ心ヲ得ズ。未明馳セテ殿ニ参ズ。小時アリテ出デオワシマス。仰セテ云ウ、コノ丑ノ時、義成申シテ云ウ、関東ヨリ実朝加判シシ送ル状ニ云ウ、朝雅謀反スル者ナリ。在京ノ武士、畿内ヲ馳ケ、家人ヲ追討スベシト云エリ。仍テ院ノ御所ニ馳セ参ズト云々

前夜おそく鎌倉から平賀朝雅謀反の報が飛びこんだ。在京の鎌倉武士たちに追討令が下った、というのである。

ために後鳥羽院は北面ノ武士たちを集め、平賀朝雅を守るための一戦をおこすつもりだったのであろう。事件の性格付けを、藤原定家はこう断定する。

時政ノ嫡男相模守義時、時政ニ背ク。將軍実朝ノ
母子ト同心シ、繼母ノ党ヲ滅スト云々

北条義時が父時政にそむいた。將軍実朝も母の北条政子ともどもこれに組みして、繼母牧ノ方の党を滅した、
というのである。

戦況は、日中になって平賀朝雅邸に院の兵が集り、在京武士団に応戦の氣勢だった。だが「官軍甚ダ少シ」で、一気に揉みつぶされてしまう。「官軍悉ク疵ヲ蒙ル」で平賀朝雅は敗亡して山科へ追いつめられ、ついにそこで自害、首を刳ねられて一件は落着する。

史家の大半は事件の性格を時政と牧ノ方が共謀して、
鐸の平賀朝雅を実朝にかわって將軍位に就けようとした
ものだ、と断定する。

したたか者の北条時政も後妻牧ノ方を溺愛して晩年に
至って愚挙に出た、とする。果たしてそんな短絡的な事
件だったのであろうか。

「明月記」が明らかにしている朝雅援護の「官軍」がす
でに主謀者の実像を瞥見させている。朝雅を新將軍に擁
立する陰謀に後鳥羽院の白い手が動くのがちらつくでは

ないか。

その白い手は、すでに一年半前の建仁四年(元久元年)
の正月末始動している。

関東に兵乱があった。畠山重忠が蜂起、北条時政を討
った。時政はやぶれて山中に逃げこんだ、というデマが
京都でばらまかれた。大江広元も殺され、京都の大江の
留守宅は大騒ぎになった。

ところがデマだと判明すると、藤原定家は「明月記」
で「天狗ノナセル所カ」と犯人を言いあてようとする。
九条兼実がしばしば後白河法皇の奸計を「天狗ノ所業」
としたのと同じ筆法である。

このあとが坊門ノ姫君の鎌倉下向時における時政と牧
ノ方の愛子政範の謎の死である。ここで鎌倉譜代の武臣
畠山重保(重忠の長子)と平賀朝雅との諍論がある。鎌倉
武士団の内部分裂が兆すのである。

兆しだけではない。半年後の元久二年の六月、畠山重
忠の兵乱が京都へ報ぜられる。こんどはデマではない。
愛子政範が急死したのは、同行した畠山重保の手にかか
ったものだ、と夫時政に訴えた牧ノ方は兵をさし向けさ
せる。畠山一族は皆殺しの目に遇った。

「明月記」はこの事件処理を「庄司次郎へ畠山重忠ヲ誅シオワシヌト云々。時政脚力ヲ以テ之ヲ申スト云々」と書く。北条時政が後鳥羽院と太いパイプでつながれている事実を裏付ける。

そんな過程で、在京して後鳥羽院に好遇されている平賀朝雅の野望が月日と共に肥大化してゆく。

朝雅が上洛の主務だった伊勢における平氏の残党の伏滅自体が眉ツバだとは、すでに書いた。守護職の山内経俊が手が出ず兵を引いた賊の大軍が、わずか二百騎の朝雅軍に一蹴されている。ために山内氏は守護職を喪い、朝雅にその座を奪われてしまった。

平氏の残党、賊の大軍という情報自体が怪しいものだった、と考えられる。あるいは賊軍の大半が、いつでも寝返りを打つ後鳥羽院の息がかかった軍勢だったのかも知れない。

それはともかく、後鳥羽院の掌中に丸めこまれた平賀朝雅は義父母の時政牧ノ方を焚きつけて將軍実朝を謀殺しようとする。

これを嗅ぎつけて、姉の尼將軍政子に密告したのが問題の人阿波ノ局である。京都にいたころは後鳥羽院と通

じていた、という噂のある姥姥である。

阿波ノ局は夫の阿野全政（頼朝の弟で九郎義経と同腹の兄）を謀反の嫌疑で殺されている。にもかかわらず一命を温存し、姉政子のかたわらで嘉禄三年十一月（一二二七）に天寿を全うしている。

彼女が後鳥羽院を通じたという確証はないが、鎌倉の情報が適確すぎるほど京都へ流れている事実には、彼女の存在を見逃すわけにはいかない。

一例が承久元年（一二二九）駿河の兵乱である。阿波ノ局の息子阿野時元が二月十九日に兵を挙げたものである。北条義時が討伐の兵をさし向けようとすると、途端に二十日京都から使者が到着する。

その前月二十七日に將軍実朝は鶴岡八幡宮で公暁のために暗殺されているわけだが、京都の使者は後鳥羽上皇じきじきの沙汰として、これまで実朝の無事息災を祈ってきた陰陽師をすべて免職にした、と報じている。

じつにタイミングが良い。良過ぎるのである。実朝横死を表面は悼みつつも、たったいま発生した阿野時元の反乱が京都とは無関係だ、と釈明したげである。

この好タイミングは偶然であろうか。すぐ一兩年後に

東西の手切れ、承久ノ変が發動するだけにカンぐらぬわけにはいかない。実朝の横死で混乱する鎌倉。そこをねらってわが子阿野時元の蜂起だ。当然、京都の後押しが考えられるところだが、タイミング好く使者を送りこんで犯跡を烟滅させる。後鳥羽院と阿波ノ局との緊密な連繫プレイを想定したくなるのである。

まさしく藤原定家が洩らす後白河法皇をしのがんばかりの犬、後鳥羽院ではある。

その犬、平賀朝雅事件の落着時に面目躍如である。

山科へ追いつめられ自害した平賀朝雅の首が鎌倉武士の手で京都の市中へ運ばれてきた。すると後鳥羽院はわざわざ車を出迎えて、朝敵の首をとっくり検分する、と言わんばかりに無言の対面した、と慈円は「愚管抄」で触れている。

朝雅追討の鎌倉武士が畿内を馳せはじめると、院に官軍を集結させ、朝雅援護に立った後鳥羽院が、一夜明ければ朝雅を朝敵呼ばわりするのである。

將軍頼朝の死後、鎌倉で渦巻いた陰謀暗殺、とりわけ源氏功臣の哀れな末路を、史家はすべて北条氏の黒い手

にかぶせてしまふ。だが、その幾つかは京都の白い手が汚がしている。

承久ノ変で京都へ発向するのを洩るわが子泰時を、北条義時はきっぱりと誡めした。

後鳥羽院の御代になって国は乱れ、正しい政治がおこなわれていない。この体制を一変させることこそ、万民の愁れを無くし、皇祖皇宗にこたえる道である。

積年にわたる後鳥羽院への憎悪をこめた言葉である。親鸞は「教行信証」の末段で書く。

ココニ以テ興福寺ノ学徒、太上天皇(後鳥羽)ニ今上(土御門)ノ聖曆、承元丁卯ノ歳、仲春上旬之候ニ奏達ス。主上、臣下、法ニ背キ義ニ違シ、忿(イカリ)ヲ成シ怨ヲ結ブ。茲ニヨリテ真宗興隆ノ太祖源空法師、并ニ門徒数輩、罪科ヲ考エズ、ミダリガハシク死罪ニ坐ス

鋭く後鳥羽院の念仏停止を非難するのである。

「主上(後鳥羽院)臣下、法ニ背キ義ニ違シ」と大胆に書くが、これは後鳥羽院が承久ノ変の敗北で隠岐島へ流さ

れた直後、すでに書き上げた「教行信証」の末尾に書き添えたものであるという。

最近世はいざ知らず、この国で天皇を批難する文章は珍らしいが、親鸞の果断は別として後鳥羽院政の実体がかがえるであろう。

三

平賀事件の総括は、朝雅が殺され、畠山一族が滅び、そして北条時政は伊豆の北条郡へ蟄居させられた。鎌倉方で得たものは何一つない。

鎌倉の動揺はこれだけではおさまらなかった。月があらたまった八月七日、「吾妻鏡」は「宇都宮弥三郎が謀反、発覚ス」と報ずる。

この謀反の内容が、すこぶる曖昧である。要するに、頼綱が北条一族を滅ぼそうと企んだ、という風聞だけである。

頼綱は後年になって上洛、法然面受の弟子となったほどの篤信の念仏者だ。謀反の濡れ衣を着せられて方途に迷ってしまう。使者を結城七郎朝光に送って、北条政子や義時の疑惑を如何にして解くべきかを相談する。

「坊主になってしまえ」

ぐらいの答えを結城七郎は返したにちがいない。

八月十六日、宇都宮弥三郎頼綱、下野国ニオイテ通俗ス。法名蓮生。同ジク出家スル郎従六十余人ト云ウ

一族郎党六十余人が即座に出家してしまったのである。

蓮生は熊谷次郎直実の出家名と同じである。浄土宗関係では熊谷を「れんせい」と呼び、宇都宮頼綱を「れんしょう」と呼びかえている。

それにしても即日六十余名の出家通俗は、聖道門の旧仏教ではあり得ないことであろう。然るべき戒師を得て、おごそかに、もったいらしくしなければ落飾は不可能である。ここらあたりに専修念仏の大衆性がある。手続も簡単で、思い立ったら即座に出家できるのである。集団出家など、これまでにはあり得なかった図であろう。

入道蓮生となった宇都宮頼綱は謀反発覚の十二日後、鎌倉へやってくる。法体の姿で北条義時に面会を求める

<蒙古軍襲来の図>



が許されない。やむなく結城七郎邸へはいった。結城は機会あるごとに頼綱のために「取りなし」たので、ついに許された。

謀反の内容については最後まで不明である。武士団の結束を乱そうとするデマゴグとしか考えられない。発信源はどこであったのだろうか。

そんなデマゴグに屈せず、念仏という純粋な同朋愛で結ばれ、難をくぐりぬけた結城、宇都宮の結束は鎌倉武士団の強固なエネルギーとなって子々孫々に継承されてゆくのである。

念仏という純粋な同朋愛。

これは、ずっと後年の話になるが、九州の地で未曾有の国難である元寇（蒙古軍襲来）時における驚嘆すべき結束力となって発現する。

蒙古軍襲来が迫るや北条執権は九州に領地を持つ鎌倉武士団に国土防衛のため前線へ赴くことを命ずる。その主力は宇都宮氏であり、渋谷氏、島津氏、相模の大友氏であった。

すでに鎮西の地には浄土宗の二祖弁長によって深々と念仏の種子が蒔かれてあった。在地武士団の信仰結束も

強かった。そこへ鎌倉から次々と守護職の武士たちが赴任してくる。ほんらいなら支配者と被支配者の間で深刻な対立が生ずるところである。それがなければかりか、肥後(熊本)の長浦遠貞入道行西のように進んで領地の一部を大友能員にゆづっている。豊後の在地武士の曾禰崎入道道西は、これも大友氏一族の田原貞広に田畑五町を「親睦」のために提供する。

宇都宮氏、渋谷氏が篤信な念仏一族であることは、すでに触れた。嘉祿の法難時、法然の遺骸を西山に移折、自発的に警固の役に馳せ参じた武士のなかに宇都宮朝業(頼綱の弟)や渋谷七郎の名がある。また大友一族が一遍上人の熱烈な信者であったことは有名である。

在地、守護職とを問わず、彼らは国難に際して一致協力して奮戦力闘した。蒙古軍撃退を神風の奇蹟のみに帰するのは誤まりである。

蒙古軍は大陸の武装集団であって、水軍ではない。筑紫の一角に取りついたら絶対にその橋頭堡を維持したであらう。彼らの能力は地上戦闘でのみ最大限に発揮されるからだ。

それが、沖の軍船に掃射した事実、日中の戦闘で安

定した橋頭堡を確保し得なかったからにちがいない。そこへ小暴風が夜陰になって吹き荒れたのであらう。小暴風であった証固に、地上には殆んど被害をもたらしていない。ことに第一次攻撃、文永ノ役では夜になって風が吹いたという形跡すらない。

神風の奇蹟は神国日本をうたいあげた誇張であって、後世の国防、とりわけ太平洋戦争で致命的な過誤をおかさせる原因となった。蒙古軍上陸の水際で関東九州の武士団が如何に奮戦力闘して防戦したかを過小評価したためである。

当時の蒙古軍はすでに鉄砲を所有した近代軍隊であった。それに耐えた防備軍の結束は、その方が神に近い行為だったはずである。

北条執権にしろ、九州の地から捲き返してきた足利尊氏にしろ、皇国史観からすれば「逆賊」である。彼らの能力を蔑視し、自然現象の神風に依存することこそ、御陵威(みいつ)の顯現には必要だったのかも知れない。

家庭を愛し、その集合体である国土を護りぬこうとする武士団のモラル。その根底に強い念仏信仰が根をおろしていた事実、あらためて注目しなければならない。

法然浄土宗が、二祖の弁長を鎮西に、三祖の記主を鎌倉に擁したのも武士団の信仰結束と無縁ではなかったはずである。

この武士たちを蕃族と蔑視する京都の後鳥羽院を中心とした一部の公卿たちは、彼らの精神的基盤となる専修念仏の徒が憎悪のマトであった。鎌倉に対して権謀術策を弄するかたわら、陰險な手段で法然一派の断圧を策しつつあるのが、元久から建永へかけての宮廷の機運であった。

後鳥羽院側近の念仏者への憎悪。宮廷歌人だった藤原定家は「明月記」の建保元年（一二二三）七月十八日の条で、端的にこう表白している。

伝エ聞ク。左中将伊時朝臣ノ妻（前内大臣ノ落胤ト云々）出家シ尼トナルト云々。是レ、近代念仏宗ノ法師バラノ為ストコロカ。天下ノ姪女、競イテ屋形ヲ仮リ、狂僧ニ屬従ス。スデニ流例トナスノミ。

念仏を信じて尼入道となる女性は、これみな姪女であ

り、彼女を指導する念仏僧は狂僧なのである。

こうした京都宮廷のムードがどんな残虐手段に訴えて出るか。容易に推量を立て得るはずである。ただし、それは時代をへだてた者の眼であって、渦中で生きる当事者たちには何も見えなかったことであろう。

日ごとに念仏信者は増大した。京の貴賤男女の間で、東国西国における武士や農民たちの間で。

だから一部の念仏指導者たちは、有頂天になって過激な言辞を口にし、驕慢な行動に溺れた事実も否定することとは出来ない。

こんな風沙のなかで、ひとり苦悶する公卿がいた。公卿と言っても超トップの立場にある前ノ関白九条兼実であった。

（つづく）

『浄土』誌の購読希望者、新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。本号より、新たに年会費を二五〇〇円に値上げさせていただくようなことになりましたが、なにとぞ暖かいご配慮をお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○本誌『浄土』も四十五巻に入り、寺内大吉先生の長期連載『念仏じり三國志』も丁度六十回目を迎え、実に昭和四十九年五月『浄土』四十巻第五号よりはいじまった連載も五カ年が経過したわけである。寺内先生は相変らずのご活躍の中で、この作品には溢れる熱意と努力を傾注され、物語の展開も縦横に飛躍し、法然上人の時代と人々の生活振りが活写されている。さらにいえば、法然仏教及び法然教団への新しい光を照射すべき新解釈や卓見を随所に織り込まれて、ユニークな史観をも披露されている。ますます快調なる連載の筆運びとともに、寺内先生の今後のご精進を願ってやまない。

○また既報の通り、今月より弊会年会費を従来の一千元から二千五百円に、いよいよ値上げさせていただくわけである。すでに一部の会員諸兄からの暖かいご配慮をもう

いただき、大方のご寛恕を得られたようでもある。物価高に便乗して、やみくもに値上げをしたわけではないのであるが、小さな雑誌、浄土信仰への心を寄り合わせる小冊子『浄土』の誌代として、できるだけ廉価な状態で続けたかったが、諸般の事情からこうした決断となつてしまったことを読者諸兄に改めてご了解願いたいのである。どうか、今までにもまして弊会へのご支援をいただき、またこの機会にさらに多くの新会員のご加入を願うべく、広くご紹介を賜わりたいのである。

○ところで善導大師千三百年のご遠忌のための色々な企画も、諸種の成果となつて表われているようである。宗門はもとより、各教区や教化センターあるいは篤志な念仏者の間で、多くの教化冊子が刊行されている由である。弊誌でもそうした企画や成果を誌面に広く紹介したいので、どうか気のつかれたものがあればお送り願いたいものである。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 四月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十四年三月二十五日 印刷
昭和五十四年四月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒(三) 振替東京八一八二一八七番

=好評発売中=

大正大学名誉教授 中村康隆著

『宗 教 学 小 論 集』

—天の饗宴と地上の饗宴—

A 5 判 266頁 上製函入 定価 4,000 円

◎永年に渡り、宗教学、宗教社会学、仏教民俗学などの分野で研鑽を積んでこられた著者の広汎な学術論文集の待望の新刊。

発行 国書刊行会

〒 170

東京都豊島区巢鴨 3-5-18

振替 (東京) 5-6 5 2 0 9

■念仏信仰和訳宝典三部作■

『和 訳 法 然 上 人 選 択 集』村瀬秀雄訳著

B 6 判 387頁 上製函入 定価 2,500 円

『和 訳 善 導 大 師 観 經 四 帖 疏』村瀬秀雄訳著

B 6 判 584頁 上製函入 定価 3,500 円

『和 訳 浄 土 三 部 經』村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。

万人必読の和文聖典です。

発行 常 念 寺

〒 256

小田原市国府津 5-14-49

振 替 (横浜) 8 2 9 6

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋 1-11-6

振 替 (東京) 8-8 2 1 8 7